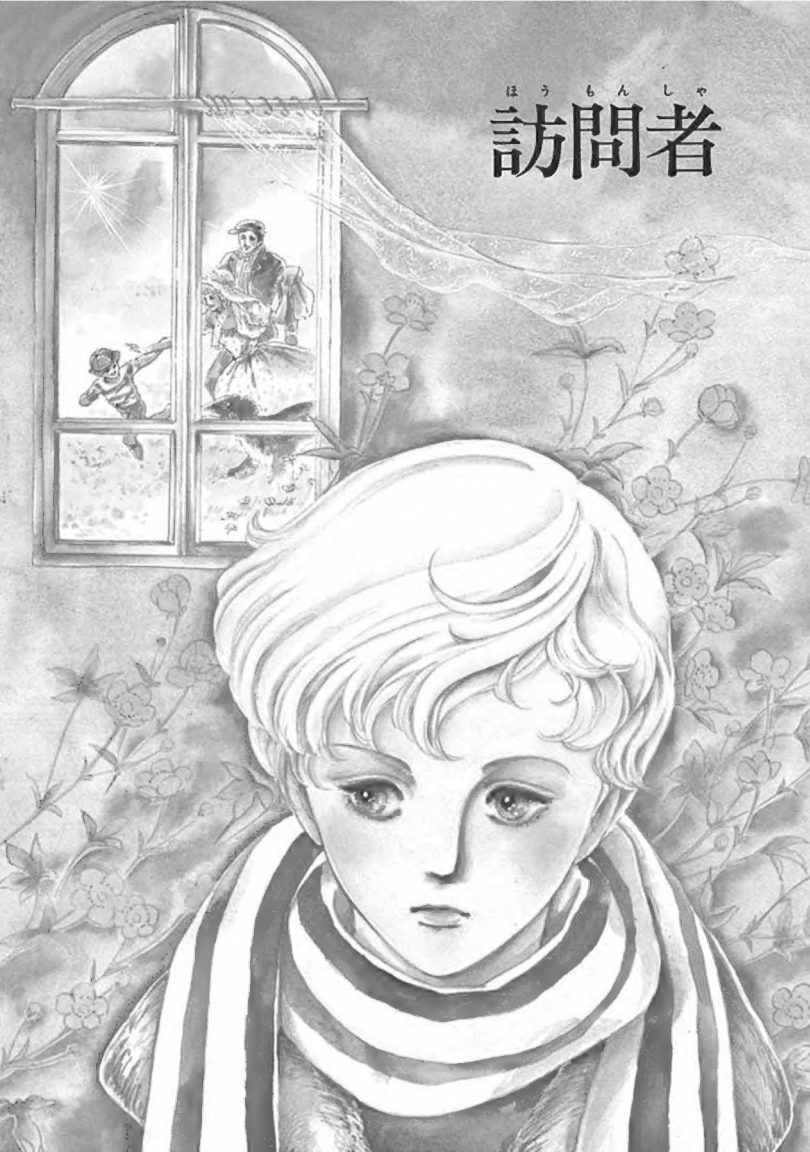
萩尾望都
Moto Hagio
Presents
訪問者・
湖畔にて
〜エーリク
14と半分の年
の夏〜
Visitor. At the lakeside

Contents

表紙イラスト／萩尾望都

表紙デザイン／佐藤千恵＋ベイブリッジ・スタジオ

Visitor. At the lakeside

ほうもんしゃ
訪問者

Molto sostenuto
14になるまでに才能ののびたほうの学校に入れるんだってさママは
ほほう できみは…音楽が好きかね絵が好きかね
どっちもぼくね
ガリバー旅行記が好きだ
ほほう!冒険か!
うん ひとりでさ
それと犬ね犬飼いたい
犬 いるだろ?
あれはパパが飼ってるんだ
ああ自分のがほしいんだね?
そう うちじゃみんな自分のを飼ってるんだよ
ママは何を飼ってる?
ボクだよ
で ボクだけなにも飼ってないんだ

ぼくの家の庭には
なしの大木があって
5月になると
まっ白な
花が咲く
そのころになると
結婚の記念日だと
ママは言って
白い
チョコレート
ケーキを焼く
パパは
甘いケーキは
食べない
かわりにだまって
キルシュか
ビールを飲む
パパは無口だ
ママは言う
酒飲みのルンペンと
結婚するんじゃ
なかったわ

ママはお勤めし

パパは売れない〝芸術的な〟写真ばかり撮っている

ぼくらはけっこうすてきな一家だと思う

バーン

パパ！いる？どこ？

ママ！

ねえ！

うるさいわね静かにして…

パパはまた職業安定所よ

いまねいまね

表通りで子猫が死んでるんだ

それを親猫がなめてるんだよ

食べてるんじゃないの

育たない弱い子猫は親猫が食べてしまったりするわ

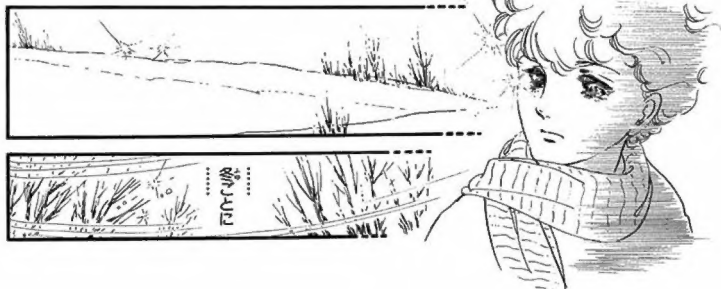
……どうして

ちがうよちがうよ

子猫は死んでるんだ

親猫は知らなくて起こそうとしていっしょうけんめいなめてるんだよ

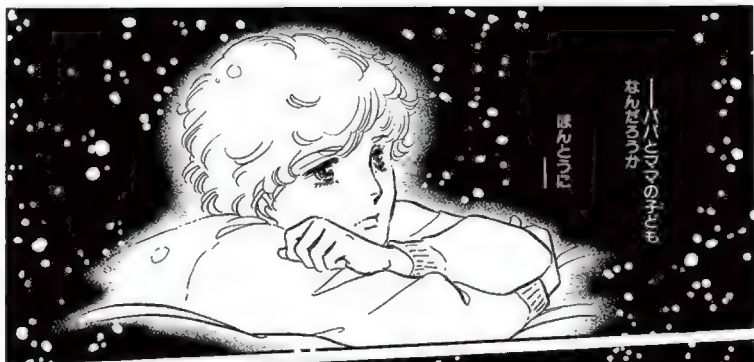
さ今日は絵画教室でしょ!?
さぼっちゃだめよ!
……ぼくは
家の中でときどき行き場がなくなるんだ
……
バ
ン
猟はルンペンのパパの趣味だ
ぼくはとても悪い子なんだよ
銃の音が快感なんだもんね
だからパパが銃をかしてくれたらなぁんだって撃ち殺しちゃうんだ
鳥も
猫も
ウサギも
敵も 宇宙人も
宇宙人が友好的だったらどうするね
友だちなんかはどうするね
……そしたら……撃たない
……ほんというと鳥なんか撃っちゃかわいそうだよね
でも……こうして猟にくるじゃない
やっぱり悪い子なんだ

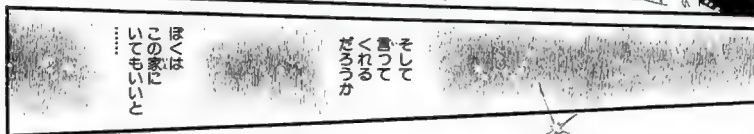
おまえ　神さまがきた話　知ってるかい
ううん　知らない
そして　森の動物を　たくさん殺している　狩人に会った
「おまえの家は?」と　神さまは言った
「あそこです」と　狩人は答えた
「ではそこへ行こう」　裁きをおこなうために
教会にも　行かないパパが　神さまの話?
あるとき……　雪の上に　足跡を　残して　神さまがきた
神さまが　家に行くと　家の中に　みどり児が　眠って　いた……
それで　神さまは　裁くのをやめて　きた道を　帰って　いった
ごらん……　丘の雪の上に　足跡を　さがせるかい?　オスカー
……冬ごとに……

ぼくは雪の上に
神さまの足跡を
さがした
―たいせつなものが
この世には
あるのです
―
ぼくは
冬ごとに
パパが好きに
なった
――
たとえ
家では無口で
ぼくを無視
していても
ルンペンで
ママと
ケンカばかり
していても
いつごろから
だろう?
春になっても
ママが
白いケーキを
作らなく
なったのは
それでも
ぼくは
思っていた
ぼくの一家は
うまく
やってると
―あの事件が
起こるまでは―

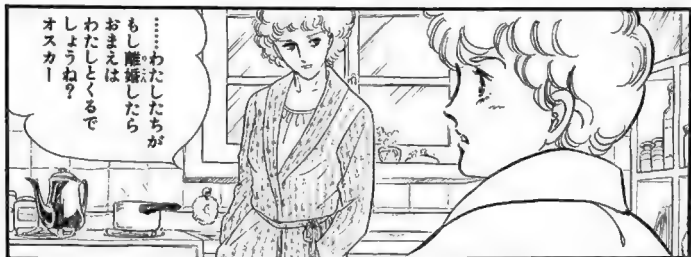
ぼくが9歳のクリスマスの前だった
もう一カ月も前からカレンダーの小窓をひらき
きみんちもうクリスマスマジパン買った？
みんなでクリスマスを待つのだ
うちはいつも姉さんが作るんだ
ぼくはくるみ割り人形にされてた…アレレ？
ほら〝魔法で〟ぬかした！
2×2＝4
4×2＝8
8×2＝
……
チョキチョキ
オスカー
ほらーっわかんなくなっちゃった
学校ではクリスマスの数日前に父兄を招いての学芸会が開かれるのだ
もういっこ
おーし
このわっか太く切りすぎよォオスカー
たはァぼくも太いかなァと思ったんだけど…
ハハ
こわくなーい？
いす動かすなってば

なん日も練習した劇は大成功!
パ
まあ
あなたは?
やさしい
クララ
ぼくは
魔法で
くるみ割り
人形に
されていた
王子だった
のです
パ
いつもは
おしゃまな
となりの
ニーナ
リンリン
リンリン
きょうは
かわいく
みえたり
して
キロリン
キロリン
パ
パチパチ
よかった
ァ!
わー
セリフ
とちっ
ちゃった
わかんない
うまかった
うまかった
まあ
校長先生
いつも
うちの
オスカーが
お世話に
なって
ライザーさん
でしたな
いやこれは
オスカーの
おかあさま
ですか?
お美しい
ですなァ
うちの子は
わがまま
ですから
どうぞ
こちらへ
いや　お若い
結婚
なさってるとは
思えませんな
まァ

ママ　ぼく　どうだった
あんなに　やれるなんて　ママ　鼻が　高いわ
芸術性にばかり　こってましてね　なかなか　売れませんの
パパ
パパ　ぼく　どうだった？
先に　帰るよ
商社へ　お勤め　ですって？
ご主人は？
え……　カメラマン　ですの
パパ！
ぼく　いっしょう　けんめい　やったのにな
何よ　今日は！　ふてた態度で　先に帰って
いまさら　何を　とりつくろう　気だ！
だれの先生だ　めいっぱい　こび売りや　がって！
何を　言ってるのよ

またただ――
こんどは何が原因かしら
いつも原因なんて
ぼくには
わからないけど……
あなたは息子のことなんて
ひとつも考えてないのよ
だれの息子だ
だれのって
言うのよ
何をしてるの
部屋にお行き！
また寝る時間を
守ってないのね！
おやすみなさい
どうして
言ったとおり
しないの！
ママは
毎日働いて
疲れてるのよ
どこの
家でも
パパとママは
あんなふうに
ケンカするのだろうか
どこの
家でも
子どもを
さして
だれの子だと
言うのだろうか
――ぼくは

——パパとママの子ども
なんだろうか
ほんとうに——

雪の上に
足跡を残して
神さまは
くるかしら
……

そして
言って
くれる
だろうか
ぼくは
この家に
いてもいいと
……

ママ おはよう!
……
カチ
ボッ
四年生にもなって 気がきかない ストーブも つけないで……
ミルクも わかさないで飲んで…… かしなさい!
ごめん…なさい
……パパ 起こしてこようか
ママ
パパは あの犬連れて 猟よ さっさと 出かけたわ
……わたしたちが もし離婚したら おまえは わたしとくるで しょうね? オスカー
そんなの… ……ぼく
ぼく学校行く ミルクいい 行ってきます!
ガタン
プクプク
ママ 今日は 会社休むわ… だから 早く帰って らっしゃいね

ケンカしたあと
別れるだの
出てくだの
これまでもよく
あったんだ
……
……となりの
ニーナと
チビだ
おはよう
オスカー
なんだァ?
これ!
雪だるまよ
アハハッ
パパも
手伝ったの
見て見て
これママ
パパ　わたし
これ
ぼーく!
へえ!
おもしろい
ぼくも
作ろうかな
あ
わたし
手伝ってあげる
そうだ
帰ってから
作ろう
雪だるま
パパと
ママと
犬の
シュミットと
ぼく!
はやく
仲なおり
するように
――
サク
サク
サク

ただいまァ!
マ……
あ
おまえなの
う…ん…
あの
ママ…
ほんとに
おまえが
生まれたとき
あの人は
これ見よがしに
あの犬を
飼いだしたんだわ
ぼく庭にいるよ
あとでいいもの
見せてあげる
からね
ママが
昼間から
お酒
飲むなんて
はじめてだ
はやく
パパ帰って
こないかなァ……
キキ
パパ!
おかえり
パパ!
シュミット!
ねえ
パパ
手伝ってよ!

……なんだ?
雪だるま作るんだ! 作ってママに見せようよ
あとでな
雪あつめとくね
こい! こい! シュミット!
ハッ…
あら あーら やっと お帰りね 待ってたのよ

わたしたち
別れたほうが
いいわね
飲んでるな
これまで
子どものことを
考えて
思いとどまってたけど――
オスカー!
もう
始めたの?
おっきいの
作るんだ!
パパが手伝って
くれるって!
わっ!
きゃ
こら
ニーナ!
そら
パパだ!
わァ
キャッ
パパー!!

ガチャン
ガチャン

バサードドドドサザ
ぼくちょっと帰る
なんの音なの？いまの…何かこわれたの？
わかんない ちょっと帰る
バタン
ククン
パパア？
ママ!?
キュンキュン
パパ？ママ！
パパ！ママ！

パパ
ママ!?
パ…

入っちゃいかん
パパ? ママは? いま……
中だ
死んだ
どうして……
うそだよ
ちがうよ
ちがうよ
ちがうよ
うそだ パパ……
おまえはおれとなんの関係もないんだ!

キューン
キューン
キュウン
知っていたでしょう
あの子は
あなたの子じゃないわ
あなたの子じゃないわ
ワーッ

グスタフ・ライザーだ
フーフ先生か？
息子が……階段から落ちた動かない
脳震とうかもしれんな動かすなすぐ行くから
それからヘラが
死んだ
なんだって!?グスタ…
ヘラガ死ンダ…
ソウダ……
知っていた
ソウダ
知っていたとも
ヘラ……
だが
死ンダ……
聞きたくなかった
死ンダ…
ヘラ……
おまえの口から聞きたくなかった……

――おれじゃない
なんなの？
ヘラが自殺したって？
ヘラが？まさか！グスタフじゃないのか
警察がきてるじゃないの？
ヘラを殺したのは
あのとき引き金を引いたのは
ええわたしがフーフ医師です
グスタフから電話をもらってすぐきて
奥さんのヘラが二階で死んでおりましたので警察を呼んだのです
おれじゃない
あれは
おれの知らない男だった
おれじゃない
悪いのはおれじゃない…！

銃声がしたときあなたはどこにいました？

階下です
どこですか？
台所

銃声は午後3時前近所のあらかたの人が聞いてます
それであなたが部屋へかけ上がってみると
奥さんが倒れていた
銃はあなたのですね？
そうです
猟に行って……帰ってきた直後です

発見者は亭主か
だんなはルンペン
奥さんが働いてます
近隣の人はあまり夫婦仲はよくなかったと言ってます

フーフ医師へ電話したとき〝ヘラが死んだ〟と言ったのですね
よく覚えていません
あなたが銃を電話口までもっていったのですか？
はいたぶん
たぶんとは？
動転しててよく覚えていません

どうもご協力ありがとうございます
奥さんの遺体は引きとって司法解剖に回すことになりますので
人間ひとりの死ですからいろいろ調べることがあるんですよ
グシュ
たとえば自殺か事故か
第三者による殺人か……とか
またお話をうかがいにくるかもしれません
わたしはパッハマン刑事ですお見知りおきを
――息子さんは？
――病院です
ああ…
ひたいを縫ってるんですな
麻酔がきいて眠ってるとのことで……
病院のほうは明日なら面会できると言ってました
おだいじに…
オイ病院に回るぞ
ズー
面会できないんでしょ？
アホ傷を縫った医者に会うんだよ
そうだ…おまえの食事を忘れてたな……

……どこだろう？
病院かしら？
ママは？
ぞくっ
家へ帰らなくちゃ！

帰らなきゃ!
帰って確かめなさゃ
何が起こったのか
ぼくがだれなのか
あら
ぼうや!オスカー・ライザーだったわね?
どこへ行くの?そっちは産婦人科よ
さ…寒いからお部屋に帰りましょうね
朝になればパパもくるわよ
……ア
ポロ
ポロ
どうしたんですか?
……婦長さん……!
ママは?
………
ぼうやのママはねえ
……

まあ いちいち看護婦が泣いてちゃもたないわよ
……ハイ すみません
つい……かわいそうで
でも あの子泣きませんでしたね
婦長さんがほんとのこと教えても
まあ そうねえ まだピンとこないのよ 小さいし…
……そのうちわかるわよ 死んだってのがどんなことか
……やっぱり… ママは死んだらしい
じゃあ ずいぶん前に
死んだ子鴨をなめてた親鴨と
反対のことがおこったわけだね
死んだからって なんなのよ
おまえも鳥を撃ち殺しに行くじゃないの
しかたがないでしょう!
ママは自分の死でも意見をかえないかしら
ママは もう いない
いなくなった
ぼくのような悪い子がママのために泣いたらママはおこるかしら
……

ママは
もう
いない
ママは
死んだ
——パパが
殺した——
——母親が
死んだことを
もう知ってる
のです
かわいそう
ですよ
十分気を
配りますよ
気分は
どう？
オスカー
……おはよう
じつはね
警察の人がね
あなたのお話を
少し聞きたいと
いうのよ
ピクン

いいよ
それがすんだらパパがくるの？
ええ くると思いますよ
やあ こんにちは
刑事さんなの？
そう わしはバッハマン
ちょっとだけ話しておくれ
――きのう銃声を聞いたね？そのとき何をしてた？
――ぼく 庭でとなりの子と雪だるま作ってた
で 家へ入ったの？
そうだけどあわててたから
ぼく 階段から落ちたんだ
……ぼく
びっくりした
うそかしらと思ったけど…やっぱりほんとにママ 死んじゃったんだね……
……

ぼくさ ママに 雪だるま 作って 見せてあげるって 言ってたんだよ
グス…
パパも 帰ってきて 手伝って くれるって……
きみのママは お酒を飲んでた ようだけど お酒が 好きなの？
うん カゼをひくと 飲むんだ
お酒って 体があったまる でしょ？
そうか そう わたしも よく飲むよ
ママは どんな人だった かい？
ママはねえ
きれいで やさしくて いつも 明るくてね
みんなから 好かれてて パパを とっても 愛してた
う－っ
う…うちの かあさんと 同じだ
そう そうかい
でも パパと ケンカなんて すること あったかい
ううん！ ううん！
パパも ママのこと とても 愛してたもの
仲がよくって ケンカなんて いっぺんも したこと なかったよ

結婚記念日になるとね
ママはまっ白な
チョコレートケーキを
毎年作るんだ
そしてね
パパは甘いものは
苦手なのに
ママが作ると
おいしそうに
食べるんだよ
それぐらい
仲いいんだよ
それに…
それに
もう
いいですか?
——パ
パパは台所の
戸口にいたもの!
ドアがバタンと
開いて——
さァあまり
興奮
しないで
ほんとだよ!
戸口にいたよ!
ニーナもチビも
見たもの!
先生いやだ!
パパ!
パパ!

よしよし…
家に帰る
わかった
わかった
まだ抜糸がすんでないからね
糸を抜いたら帰れるからね
ぼうや
いやだ!
いやだ
家に帰る
家に帰る
パパと
家に帰る
オイ…
ハア

ウラをとっていこうか
ア？
あの息子がとなりのニーナとチビも見たと言ったろ？
待てよバッハマンあんた……
あの子が父親をかばって……あの子まだここのつだぜ
偽証なんてできる年じゃないよ
わかってるさ
オレの気をすませたいだけだよ
ウンここで遊んでたのね
そしたらバタンとあの台所の戸が開いて
グスタフおじさんが出てきたのよ
あら！いたわよ！
オスカーがパパって呼んだでしょ？
でもぼく見たもんおじさんいなかったもん
ハア
ちがうもん！
戸がバターンと開いたけどおじさんいなかったもん

ちょっと待っておくれね……じゃそのときのおじさんの服装覚えてる?
覚えてるわ!いつもの服よ茶色の猟服に黒い長ぐつよ
こうかい
あれだと下半身は見えないが……
黒い長ぐつだってどうしてわかったの?
……
ちょっとアズ戸口に立ってみてくれないか
ああ
そうよそんなふうよ出てきたとこよ
アラ…
でも……いつもの服だったから……いつもの長ぐつだと思ったのよ
メガネはかけてたろうね?
かけてたわよー
どうだろうかねえ
バタン
無用心だなカギをかけてないのか
バッハマン
うちの台所の二重ドアはよく一方がもう一方のドアのはずみでバンと開くんだよ
キー
そういやうちもそうだ

奥さんの解剖報告だよ

こっから入って
ここにぬけてる

延髄か
即死だな
胃の内容物は少量のミルクとクッキー
多量のアルコール……
血液にもだ
べろべろの少し前
くらいかな…
"べろ"ぐらいか

少量のクッキー…
ダイエットしてたのかな
酒の飲みすぎは体重をふやすぜ
カゼには多すぎる
……
あのガキめ

銃には奥さんの指紋がついている
ここと　ここだ
引き金には？
だんなが部屋に入って驚きのあまり銃をひろっていじってるからあとはだんなの指紋ばかりだ
驚きのあまりね…

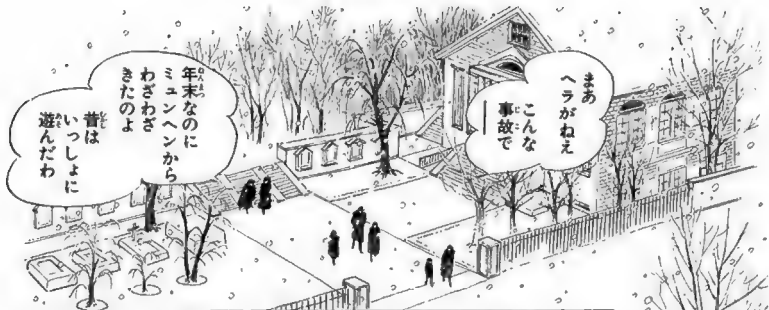
奥さんの右手中心に硝煙反応がでてる
窓をつきやぶって外に出た弾はなしの木の枝にくいこんだ

だんなの服の硝煙反応を調べても話にならんし……
朝から猟場で撃ってきた後で……
もうひとつ硝煙反応がでてるんだ
どこだね
切れた息子のひたいさ
ひたい…
よく調べたなァ
ふむ
うーむ猟から帰っただんなが荷物を部屋に置いてそのまま台所へおりてゆく
いれちがいに少しごきげんの奥さんが入ってきて銃をいじりだす
ふと手がすべって――
証言によればだんなはいましも戸口から出るところ
ひたいね
パパとママは
……
ケンカひとつしなかったよ!

…いたくないか
うん
…なぐって悪かったな……
……ううん…ちっともいたくないんだ…
もうクリスマスカレンダーいらないね
刑事さんがさ病院でパパとママのこと聞くんだ
それでぼく毎年ママが結婚記念日に白いケーキを焼いてパパがそれをおいしく食べるって言っちゃった
……白いケーキってチョコレートケーキか
ハハ　そりゃもうなん年も前の話だ覚えてたのか
なんでそんな話したんだい

……ママが帰ってきたら……葬式をしなきゃなァ……
…うん
パパ……
ママを愛していた？
ずっと一生愛していこうと思った？
──パパ
何かわけがあったんだよね
おまえはおれとなんの関係もないんだ！
パパと別れたらママとくるわね？
ママ
パパをもう愛してなかったの？
ぼくはどうしてかわからないけど
とても不幸だったんだよね
そうだよね……

パパは
ママを撃とうなんて
きっと
思いもしなかったよね
パパって人は
けっして
そんなことが
できるはずの
人じゃないもの
──ぼくが
パパの
子どもじゃ
ないから
──だから
ママを
殺したんじゃ
ないよね……
雪の上に
足跡を残して
神さまがくる
……家の中には
子どもがいる
昔 そう
話して
くれたのは
パパだよね
ぼくが
パパの子どもで
なくても
この家にいて
いいんだよね…

まあ
ヘラがねえ
こんな
事故で
――
年末なのに
ミュンヘンから
わざわざ
きたのよ
昔は
いっしょに
遊んだわ
この家も
借家でしょ?
今後は
どうする
つもりなの?
本気で
仕事を
考えてね
だいたい
あなたは
ヘラと
結婚する
ときも
……
よしなさいよ
姉さん
子どもの前で
あの人たち
ママの
身内の人?
そう
おじさん
おばさん
いとこ
はとこ
ママの
部屋で
何してるの!?
かたみ
わけよ
まあ
若いわねえ
ヘラ
大学の
卒業式の
写真よ
これは
ルドルフ・
ミュラー
じゃない
だれ?
ミュラーって
昔
ヘラに
プロポーズ
した男よ
ハンサム
でしょ
これ
これ
わたしは
言ったのよ
ミュラーのほうが
いいって
キャッ
かってに
ヘラのものを
いじらないで
ください!!

ミュラーよ
子どもがほしかった子どもがほしかったのよ
あのころ放浪癖を出して家によりつかなくなったあなたを引きとめるためにも
子どもがほしかったのよ
あなたは疑いながら尋ねもせず
そのやさしさでわたしを苦しめ続けたんだわ
ミュラーの子よ
ミュラーとはそれきり会ってないわ
どうせ信じやしないでしょう
そんなことを聞きたくなかったおまえの口から！
愛なんてうそ何が愛なの？
わたしたちお互いに裏切り者同士だったんじゃないの!?

パパ
何してるの？
古いフィルムの整理だよ……
これぼく？
そうだ……
おまえが生まれたころはずいぶん写した
へえ
ほんとの親子みたいに見えるね
あたりまえだ！
こいつはおれの子だ
おれの息子だ
そうだおれはいまだって信じてる
おまえはやさしかった
おれを愛してくれていた
だれのせいでもないんだ……
何もかも少しだけずれた歯車のせいなんだ
だから……
許してくれ
おれのことも……

ママのおばさんやいとこたちがいれかわり遠方から訪れては去ってゆき
あわただしく年の瀬も過ぎ……
新年が訪れた
ぼくはひだいの糸を抜いたけど
カゼを理由に学校を休んだ
毎朝ニーナが登校するぼくは手をふる
このごろニーナはかわいいんだ
パパは山のような写真の整理を始めた
ぼくはだれにも会いたくない
パパとシュミットとあたたかい家の中にいるほうがいい

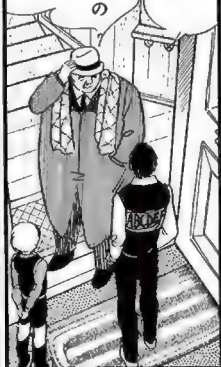
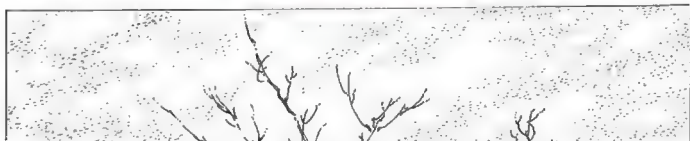
ぼくが出る
カチャ
やあ
こんにちは
オスカー
こんにちは
パッハマン刑事
お父さん
いるかね?
なんの話だろう
ウソがばれて
パパを
つかまえに
きたんだろうか

おや…？
何か……
パパ
刑事さんだよ
あ
いや
つい
近くまで
きたもんで…
おお…いいにおい
ですなァ

おひるの
うずら焼きですよ
好きですか？
すばらしい！
うちの奥さんは
苦手で作って
くれないんだ
大好物なんです

絶品だ！
あんたは料理の
天才ですな！
これは
趣味ですよ
趣味ばかりで
本職のほうは
さえなくてね

できなかったことを
悔やむのは
女を
くどきそこねた
言いわけのような
もんだよ
おばさんたちが
言ってたんだ
だまんなさい
どこで
そんなことを
聞いてきた!
……
……
……
カチャ
カチャ
カチャ
あ…そうだ
グスタフさんは
プロの
カメラマンだ
そうで!
いつか
わたしなぞを
写していただきたい
もんですが
わたしは
風景が
専門なんです
人間は撮りません
……
家族のほかにはね
—ママ…!

どうも
ごちそうさま
いやはや
こんどはわたしの
おごりで
いつか飲みに
行きましょう
二度とくるな
オスカー
あんたは
わしが
気にいらんか？
またきちゃ
いかんかね？
たとえあなたが
裁きをおこなえる
神さまでも
子どものいる家に
きては
いけないんだよ
は？

こら シュミット
いやがっちゃ だめだよ
……オスカー
おひるに 刑事さんに 話してた 神さまの 話ってのは なんだね？
あれは ずいぶん前に パパがしてくれた 話だよ
ぼくは悪い子 だったけど……
どんな悪い子でも 家にいて いいんだって
子どものいる家は 裁かれないんだ
パパは雪の上に 神さまの足跡が 見えるかいって 聞いたんだ
だからぼくは 毎年 雪の上に さがしてるんだよ

いがいと
早く

わたしは 推理小説は
大きらい
でしてね

新しい事実でも
見つかり
ましたか
ハハー これは
これはです
いや いや いや
作者は犯人を
知ってるくせに
最後まで
かくして
いるから
ハハハ
それは それは

招きに
応じて
いただいて
ありがたい

……あなたは

息子さんが
あなたの子どもで
ないことは
ごぞんじでしたか?

わたしの子で
ないのなら!
だれの子だと
いうんです!

さァ まだ
そこまではね

息子さんは
奥さんと同じ
血液型ですしね
ただ
十一年前に
妻は人工受精
すると言ってました!
市の
カウンセラーに
だんなの
放浪癖に
ついて……
ガチャ
お二人は
エッセンの病院に
検査に行かれて
ますね
その結果
お二人の間に
子どもが生まれる可能性が
きわめて少ないことが判明した
病院は
だんなの大反対で
奥さんは手続きも
しなかったと
言ってます
その後
奥さんは
あんたは
ひとの家の
うち幕を
のぞきこみ
こづき回して
楽しんでるん
ですか!
とんでも
ない……
わたしは
自他共に
認める
善良な
市民です
それなら
口を
つぐんだら
どうです!
ほんとに
こんなことは
酒が入らないと
言えませんよ
いい
息子さんだ!
いい
息子さんです
だから

グスタフ・ライザーさん
自首してほしいんです

なんでです！

なんでって
あんたが奥さんを殺したからですよ

証拠は？
不起訴
不十分
わたしはね
オスカーがかわいそうだ
あんたが自首して
罪をつぐなうのが
一番いいんです
あの子は
あんたの重荷を半分
肩がわりしてるんですよ

ごらんよ シュミット
ママ きれいだろう?
パパが撮ったんだよ……
とても愛してたんだよね
ねえ シュミット……
……どうして ママを殺しちゃったのかなあ……
……まだ起きてたのか
あ おかえり アルバム見てたんだ
パパ いろんなとこに行ったんだね
ああ… こいつはシュターデだ…
どこ?
パパが生まれたとこだよ
ここで育ったの? この海岸で?
……寒い冬には浅瀬や中州が凍ってな……
同級生が氷の割れ目に落ちて死んだことがあったな
あのあとだったな 戦争が始まったのは……
パパ 戦争に行った?
パパのパパが行って戦死した
…いまはパパのおじさんが住んでいる
今年も凍ってるな…

――海を見に出かけてみるかあした――
はじめてだろう?
ほんと!?
すごいや!
そう ぼく海ははじめてだよ!
凍ったアウトバーンをつっ走れ
海を見に行くんだ!
ハンブルクの街に着いたらおじさんに電話しようなん時になるかわからないしな
おどかすんだね?
ぼく会うのはじめてだ
ルール地方を出て小旅行だおべんとうもって
海を見に!
だけど――
ぼくたちは街にたどりつけなかった

堤防が切れていて道は全面工事中だつたのだ

あれはなに？　パパ

海岸の防風用のかきねだよ

しようがない……迂回して遠回りするか

うん

〝遠回り〟はすてきなことばだ

だつて旅行が長くなる

――でも　それから

――パパは急に凍つた海を見に行く興味を失つてしまつたようだつた

パパは一度きつたハンドルをもどさなかつたのだ

とにかく家の中を見せてくれ家主さん心配なんで
でも何も起こってませんぜ
死体でもさがしたいんですか？
あたしも困ってんだ……家賃は未払いだし水道も電気もこれじゃあ止めないと
……いや
グスタフ・ライザーの親せきにはしから電話してみたんだがきてない
「放浪癖のある男だから」と冷淡なんだよ
なぜ市民が小旅行に出かけちゃいかんのかね？
うう！
なんてこった！
なんてこった！わしはなんてまぬけだ！
追いつめなきゃよかった
たのむ……たのむたのむから……
自殺なぞせんでくれ！
ママ…ァ
オスカーんち貸家の札が出てるわよ……
まァそう？いつのまに引っ越したのかしらね
クスン…　……あたしさよならも言ってないのに……
そらそら…ニーナ……
クスン
クスン
クスン…

――パパ！
なしの花だね
――ああ
うちの
なしの花も
咲いてるね
そうだな
……
行こうか…
うん！
一月の末に
家を出てから
ぼくたちは
結局
わき道に
それたまま
その日その日の
気ままな
旅人に
なってしまった

よいしょっ!
動くぞっ!
パパ しっかり!
あいや……
車 どう するの?
動かない 車は 車じゃ ないよ

なんぎでしたねえ
よーござんしたよ
近隣で宿は
うちだけでね

一時間近く
歩いたァなんて
まァまァ

クシュン！

寒くないか

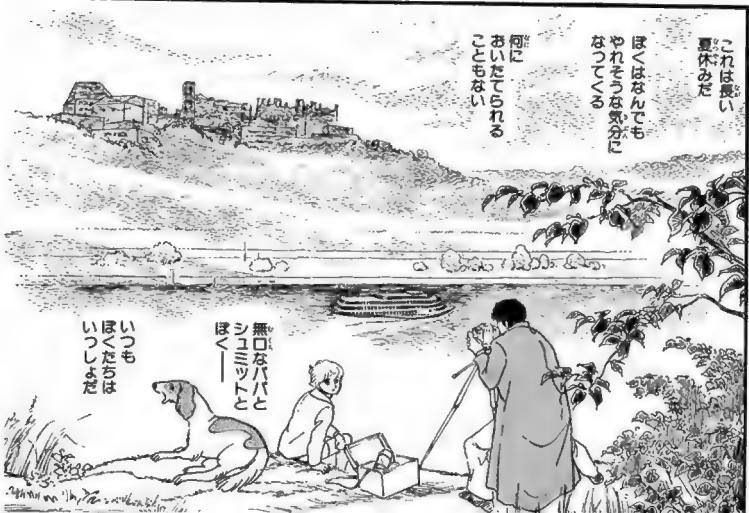
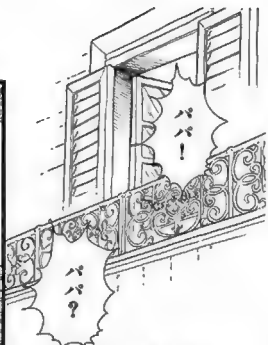
少し寒い
……

パパがぼくを
ひざに抱いて
くれるなんて

生まれて
はじめてじゃ
ないだろうか

こうやってると
ぼくは
だんだん

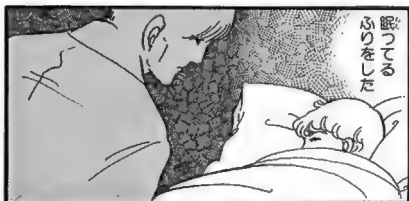
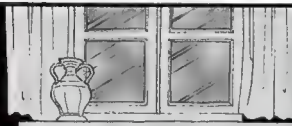
悪い子じゃ
なくなって
いくような
気がする

いい天気だねえお客さん
ああ終点まで
あらあらありがとう
いい息子さんねえ
ぼくはどんどんいい子になっていける
これは長い夏休みだ
ぼくはなんでもやれそうな気分になってくる
何においたてられることもない
無口なパパとシュミットとぼく——
いつもぼくたちはいっしょだ

パパ！
パパ？
すみません——
パパはどこかへ
行くって
言ってました？
え？
いないのかね？
買い物じゃ
ないのかね？
変だなあ
だまって
出かける
なんて
……
はじめてだ
いやだよ
おまいさん
捨て子じゃ
ないの
まさか
……？
おひる代も
もたない
ぼくらを
おいて…？
ぐう
おなか
すいたね
シュミット
……
ホテル代
だって
まだだし…
あの
パパの
カメラだけ
ないし……
たぶんどっかで
撮影に夢中に
なってるんだ……
金目のものだけ
もって出たわけだね
——もう夜中だよ
帰ってくるよ！
シュミットの
飼い主なんだ
から！
シュミットを
おいてくはず
ないもの！
——ぼくは
ともかく——
そうだよ
明日はきっと
帰ってくる

そうだよ……
きっと今日中に帰ってくるよ！
おひるまで待っててよ！
昨日もそれでほだされた
あとは警察のほうへでも行ってくれ
荷物はホテル代にもらうからな
待っててくれればホテル代も払えるよ
払うよ
ギイ
パ……パ
パパ！
パパ！
パパ！びっくりしたどうしたのさどこに行ってたの？
…ふらっと出ていきたくなる…悪いくせがあってな…
……すまんな心配かけて…
ううんいいんだ……
きっと帰ってくるってわかってたもん

9月も末になるとぶどうの収穫を祝うワイン祭りがあちこちで開かれる
陽気でおおにぎわいだ
さアさいくらでもおかわりしとくれ！泉のようにあふれてるんだ
これを味わわない手はないよ！
ガタ
ガチャン
あ
ごめんパパ……
ケガしなかったか？
いいよ服はすぐかわく
すぐかわくゥ
ヒック
え～これを見ろ！これを
どうしてくれるんだ許さねえぞォ
あ……

ウーーー
ギクッ
これを…
ク
こら
シュミット
ごめんね
パパ
ごめん
なさい
……
オスカー
こんなことを
気にしなくて
いいんだよ
なんとも
申しわけない
おわびに
一杯おごり
ますよ
それで
許して
くださいよ
まァいいよ
ま 祭りだ
いいよ
おまえが
悪いと思ってるのは
十分わかって
るから
……
どうして
パパは
わかるんだろう
ぼくがそのとき
いちばん心に
言ってほしいことばを
言ってくれるんだろう
—ぼくが
いい子に
なって
言って
るんじゃ
ないんだ
ぼくは
変わらない
ただ
パパが
ぼくの中から
引き出して
くれるんだ—
そうなんだ
あ これ
ブラームスだよ!
……
ヘラが
好きだったな

……
ママも いっしょに これれば よかったのに
そして こんな 毎日なら
きっとだれもが にこにこして
ケンカなんて せずに 暮らせるのに……
やさしく して
とがめ ないで
わかって くれて
……ママが 生きてれば よかった のに……
……ある夜半 目を覚ますと
すそに パパが すわっていた
……
……!
眠ってる ふりをした

ラララ ラ ララ ラ ラ

♪

今日は
帰りが
おそいわねえ
きみのパパ

台所にきて
夕食いかが?
ワンちゃんも

ありがとう

冬のはじめ
—
パパは再び
失そうした

パパはこの宿に
はじめは
一日おきに
帰ってきて
いたのだが
ついに……

おい どうするね? あの子の父親……だよ エンゲリーカ

でもあの子は きっと帰ってくるって 言ってるし……

そういってもう 一週間だよ…… そりゃ宿はいま シーズンオフで ひまだけどねえ…

おじいちゃん 子どもなのに おい出すのは かわいそうよ ……

なあに? エンゲリーカ

手伝って クリスマス用の アニスシード入りの クッキーを 作るのよ

トテチテタ
リンリンリンリンリン
ティラララ
リラララ

ハハハハ
パチパチ
うまい うまい
アハッ 学芸会でやったんだ

人のいい宿の主人のもとで
そんなふうに過ぎて

いつのまにか年が明けてしまった

このままあなたのパパが帰らなかったらどうする？
どうしようかなあ

おねえさんなんてほしくない？
エンゲリーカなら考えてみてもいいや
ホント？

グスタフさんが帰ってみえたよ
オスカー
エンゲリーカ！
ククッ
バタン
ぼくごめんね！
弟になれなくて
パパア！
パパ!?
まア！
……
おかえり！
パパ……
ああ
どうも…
お世話でした
長いこと……
いや
いや
仲よくやっとったよ
パパどうしたの？
左目…赤いよ
そうか…？
ちょっと
いたむんだ……
ごつん
あっつ
あぶない
！

…ずいぶんほっといて悪かったな……
いいんだ ぼくたちエンゲリーカととても仲よくなったんだよ
何かほしいかい？
お金あるの？
じゃあねえ…双眼鏡！
よく見えるやつがいいな
ちょいとぼうや……
あの人はほんとにきみのお父さんかい？人さらいじゃないだろうね？えらくきたないが……
パパだよ
何をがんばってるんだ…おれの服を…
ほっといてよ！
これがすんだらシュミットも洗うからね！
力をいれすぎたかな……？
ボロロ
おやどのおばさーん針箱かしてよ
なんだいやったげるよ
ううんいいよいつもぼくが縫ってるんだから

ちょいと　お客さん……
あたしゃ ひとのことは あまり口出し したかないけど
聞くとお子さんは 学校にも 行ってないって？
ハア…
そりゃあ おせっかいかも しれないけど
あんた 父親なら しっかり しなきゃ
あの子毎日 つくろいものに せんたくばかり 将来は どうすんですよ
……
おかえり 目医者に 行ってきた？ どうだった？
ああ…その… 栄養不足 らしいよ……
きっと ビタミンの不足だよ レバーが栄養があるよ
なア…… オスカー
学校に 行きたいか ……？
学校？
ぼく　勉強 あんまり 好きじゃない
しかし……いずれは 行かなきゃなァ 勉強せんと……
こうやって 旅行してんのも 勉強じゃないの
地理と社会のさ ぼく行ったとこ全部 覚えてるよ
ルールから出て ハンブルクだろ 南へ下って リューネブルクだろ ツェレ　ハメルン カッセル　ジーゲン コブレンツ マンハイム……

ね？
ぼく
いまのままが
いいや

ぼく
いまのままが
ほんとうに
いいんだ

ぼく
こうやって
パパの役に
立てるし

いまにもっと
いろんなことが
できるように
なるよ

パパがときどき
いなくなっても
シュミットと
待ってることも
できるし
それに……
それに……

遠くまで
凍った海の風景は
ただ
悲しいばかり
小屋には
だれかが
住んでいる
そこにも
だれかが
訪れる
彼は
迎え入れる
……
パーパー！
ぼくは呼ぶ
グスタフが
思い出の中に
帰ってしまって
ぼくを
忘れない
ように
パーパー！

おい ぼうず ハンブルクは どっちだい
あっちだよ
いい双眼鏡だな
こいつで見えるのか
どれ かしてみ
もういいだろ
おい チビ どうして こんなの もってんだ
え
くすねてきたんだろ
ちがうよ! かえせよ!
こいつは もらっとく
なにすんだ
そらっ
かえせ…!

何をしてるんだーっ
いけっ
うわっ
シュミット！
双眼鏡かえせ
かえしてやら！
待てーっ
おまえらっ

このドアホウ! くそうどもっ!
シュミットがきてくれたからね
だけど双眼鏡が……
ああ……
すごいな パパ
だいじょうぶか?
うん!
あんなやつらはろくな人間にならん! 弱い者とみれば目をつけてたかる
何を笑ってるんだ?
すごいな パパ
すごいなぁ パパ

北海の風に吹かれてぼくとパパは仲よくカゼをひいた
ぼくはたいしたことはなかったけど
パパは左目を赤くしてそこからはたえず涙が流れていた
ちちち……
ぼく見える？
見えるも見えないも目なんか開けていられるもんか
お医者の話では神経疲労だそうだ
そういうのは心のプレッシャーをとりのぞけば治るんだって……
クー
パパ
シュミットがけさから元気ないよ
パパたちのカゼがうつったかな
人間のカゼもうつるの
知らんがたぶんな
この街の獣医はどこかな…

ああ
カゼのようですな
注射をしときますよ
これはいくつですか?
11年とちょっとです
じゃあ……十分気をつけてやってください
年のせいで体力がひどく弱っているようですから
はい
シュミットはぼくと同じ年なの?
おまえが生まれたとき買ったんだよ
ヘラがおまえばかりかまうもんでな……
ヘラはいやな顔をしたなあ……
あてつけだと言って…
パパ!シュミットが薬をはいちゃったよ
シュミット?
えらくよだれが出てるな
こじらせたのかもしれん
……おい

重病の犬だって？こまるよ！うちだって犬を飼ってるんだ うつったらどうしてくれるんだ
車を呼んでくれ 医者へ連れていく
いっしょに出てってもらうよ うちはね 病院じゃないんだ
パパ
なんだと おれたちは客だぞ！
家族ぐるみ病気の客なぞめいわくだよ！
人でなし！病気のつらさを思い知れ
パパーー！
このやろう出てけーっ
ライザーさん 言いづらいが 伝染性の病気を併発しています
重いんですか？
シュミット……
クーン
……今夜もてばいいんですが

パパは今夜シュミットについているからおまえ駅前でホテルを探してそこにいなさい
どうしてぼくだけ？
熱が七度二分から下がってないじゃないか
このうえおまえのカゼの心配までパパにさせようってのか？
パパだって七度三分を上下してるじゃないか
シュミットはパパの犬だからパパが心配する権利がある！
パパのカゼは……
ホテルへ行けーっ
いやな一夜だった
そのときがシュミットを見た最後になった
……そう言えばぼくはママの最期も見なかった
さっき
……死んだよ

なにしろ目が
痛くて痛くて
涙が止まら
ないんだ

医者のやろうが
カンチがいして
えらく同情
しやがって

シュミットは？
どうしたの？

病院の裏手に
墓地があったんで
埋めてもらった……

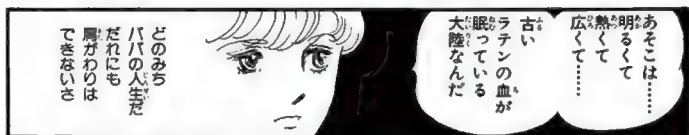
…ほんとうに…？
…シュミットは……
…苦しがってた？

苦しがってたよ
……聞くな
思い出したく
ない……

シュミットがいないんだもの……！
ターン
シクククン
……シュミットかと思った
もういないのに
ある夜
やはりパパの影があった
小さく細かった
以前見たときよりもっと もっと重たげに
パパの左目はほとんど見えなくなっていた……
パパ お祈りをさせて
神さまはこないでほしい
パパを苦しめないでください
ママ パパを許してください
おねがいです

おねがいです

ひとりになりたいんだ……
とにかくおれはだめなんだよ……とにかく……おれはもうできないんだよ
もうおまえを連れていけないんだよ……
……
──それでなカールスルーエの少し先にパパの知りあいがやってる学校があるんだ……
そこは寮があってな…おまえと同じ年ごろの子がそこで寝起きして勉強したり遊んだりしてるんだ
──学校？
そう──そう
どれぐらい？

――南米に行こうと思うんだ……目が見えなくなるまえに
――夢をもつのはいいよね

あそこは……明るくて熱くて広くて……
古いラテンの血が眠っている大陸なんだ
どのみちパパの人生だだれにも肩がわりはできないさ

どれくらい？

一年……くらいかな

二年……かな……それかもう少しか……
……だから

おまえは学校に……
――うん…パパ――わかったよ

ぼくそろそろ勉強したいし学校は…いいな
だからぼくそこでその学校で待って……

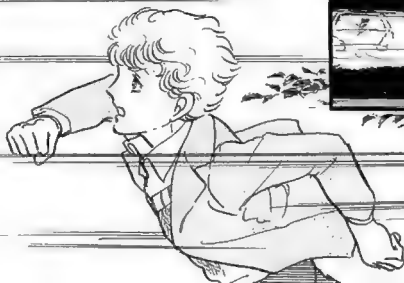
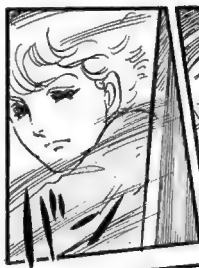
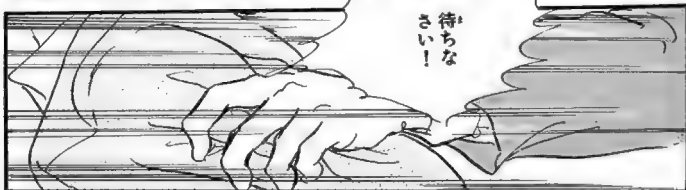
ちゃんと勉強して…

……
……
カタ…

シュミットのつぎにはぼくを捨てるんだ！

オスカー！

オスカー！

待ち……
待ちなさい
待ちなさい！

じゃあ ママをかえせ!
パパにはいらない いらない だれも!
ママを かえせ!
……だま……
ママを!
かえせ!
だまれ だまれ……
だまってくれ…!

ゴホ
ゴホー
ゴホー!
ゴホー
……そんな目で見るな……!
ヘラと同じような目を…して
おれをせめるな……!
おれはだめな男なんだだから…!
見るな……

パパ
パパにとって
雪の上を
歩いてくる
神さまは
それは
ぼくの顔をしていたの?
あなたを
裁きに
訪れた人は
ぼくなの?
あなたには
じゃあ
ぼくの
なりたかったものが
わからなかったん
だね
ぼくは……そう
なれなかったんだね

たぶん
5月は……
一年中で
いちばん
すてきな
季節だ
あの家の
なしの花も
いまは満開だ
ろうね
──どっちがいいのかな
暗く寒い冬に
いやなことを
すませるのと
明るい いい月に
悲しいことを
むかえるのと
どっちが
いいのかな……
──なんていう
学校？
……なんていった
かな

この街の高等中学校ならシュロッターベッツだね
校長先生はミュラーっていうんだ
ああそうそうどうも
この一本道さ
……ミュラー?
ぼく聞いちゃいけないかな
パパーミュラーってだれ?
パパの大学時代の友人?
ママに昔プロポーズした人?
――おばさんたちが言ってた……
パパ帰ってくるよね
ぼくはパパの子だよね
……何か言ったか?
なんでもない……

カチャ
……やあ
……おまえか
ルドルフ…
待ってたよ！
驚いたよ！
いきなり
電話を
くれるものだ
から…
——なん年ぶり——
……
これが
息子だよ
ミュラー校長だ
あいさつおし
オスカー

……
ようこそ……よく
よくきた…よく
よくきたね…
あいさつしろ
……
――こんにちは！
ヘラに
よくにてる
だろう？
さあ
入ってくれ
時間がないんだ
後はよろしく
たのむよ

……
校長先生に
よくたのんで
おいたからな
いい学校だ
よく勉強しろよ
グスタフ！
そりゃ急じゃないか
ひさしぶりに
会ったんだから
……
年寄りみたいに
昔の
思い出話でも
しようってのか？
よしてくれ
パパ
ぼく
――パパ
南米の
色切手をはった
絵ハガキが
ほしいな
うそつき
ああ
送るよ
うそつき
じゃあな
元気でな
パパ

パパ
ぼくほんとに
なん年も待ってて
いいね?
パパほんとに
帰ってくる?
帰ってくるね?
ギュッ
ーパパ!
グスターフ!!

さあ…オスカー
長旅だったのだろう?
つかれたかい?

部屋へ行って
休むかい?

……

——ううん!
授業うけたいな
ぼく学校一年ぶりなんだ

——パパが
言ってたからね
よく勉強しろって——

部屋に行っても
ひとりじゃつまんないし

そうか……
じゃあ…

ああ…
ユリスモール

うーそだ
ルールからさ
ぼくの
おやじだよ
南米へ
行ったのは
キッ
それは
遠くだねえ
オスカー？
―ぼくは
いつも―
たいせつなものに
なりたかつた
だいじょうぶだよ…
オスカー
ねえ
彼の
家の中に住む
許される子どもに
なりたかつた

きっと すぐに なじむよ
オスカー…
—ほんとうに
—家の中の子どもに なりたかったのだ—
訪問者＊おわり＊ プチフラワー1980年春の号に掲載

湖畔にて

エーリク　14と半分の年の夏

その夏をぼくはボーデンで
シドとくらすことにしていた
で　寄宿学校が終わると
まっすぐそこへ行った

ぼくたちは語り合うのが
ほとんどはじめてだったし
ふたりでくらすのも
はじめてだった
だけど　たぶん
うまくやっていけると思う

やっていけるさ　と
シドはいった

ユーリ・シド・シュヴァルツは
ぼくの義父だ
彼は左足がない

シドは
ボーデンの湖畔で
古いホテルを経営していたが
それは太って気のいい兄夫婦に
まかせてしまって
彼は
ホテルの近くに
かなりボロい
花と草で囲まれた
家を借りた

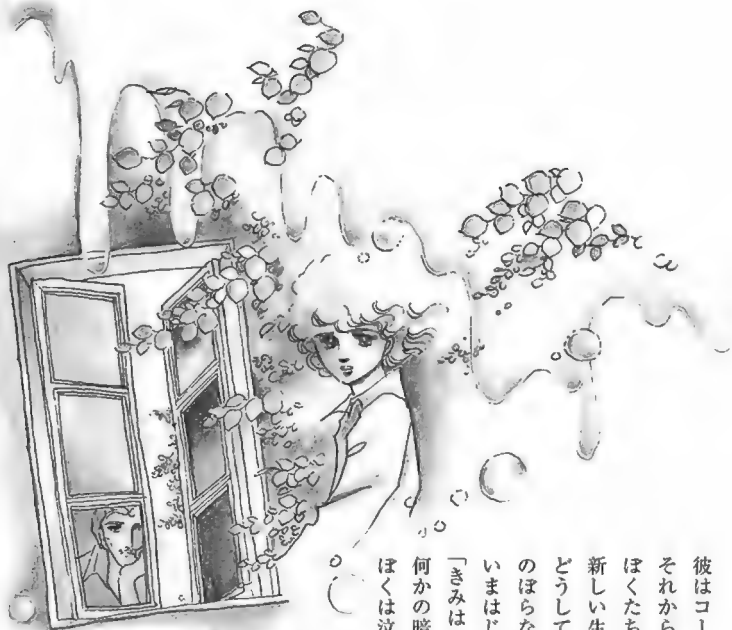
わたしたちも
夏中は花と草になろう　と
シドはいった
シドは一日中　ぶらぶらしている

シドはぼくに寝ろとも起きろとも
いわない　もっと食えとも
勉強しろともいわない
シャワーをあびろとも
着がえろともいわない
彼は本ばかり読んでいる
彼の花や草のようにというのは
何にも気にかけないことらしい

食料をもってくる
兄さん夫婦が
家がきたないとあきれていた

「あなたはおよそ父親らしくないいね」
と　ぼくがいうと
彼はなんだか　ぼんやりと
気付くと長いこと
ぼくの方を見ていた
「おい　ここへおいで」
シドはいった

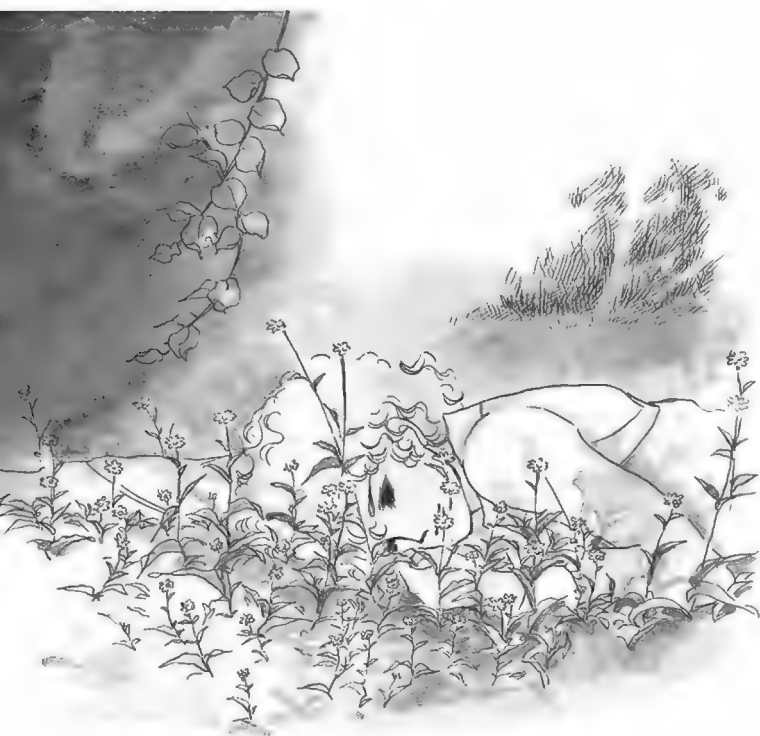
ぼくは　コーヒーのために
カップを洗っていた
「おい　おいで」
と　シドがまたいうので
カップを割ってしまった

「何か話すことがあるかい」と
彼はいった
「あるよ」とぼくはいった
「カップをひとつ割ってしまった」
「まだ　デザート皿がある」
ぼくたちは
残ったカップを
かわりばんこに使って
コーヒーをのんだ

彼はコーヒーのゆげをかいだ
それから彼は　日に何度となく
ぼくたちの間を通りすぎながら
新しい生活の日々にまぎれて
どうしてもおたがいのくちのはに
のぼらなかった人の名を
いまはじめてつぶやいた
「きみはマリエによく似ている」
何かの暗号のようだった
ぼくは泣きそうになった

日々の回転というものは
たいていのばあい
やさしく　ゆっくりと　過ぎてゆく
一日には　たくさんの小さな変化がある
陽ざしは明るく
ぼくたちの影は長くのびる
葉かげに　水かげに　花かげに
きらきらと　するものがある

魔法のかかったような静かな夜に
ぼくたちはマリエのことを
たくさん話した

そうするとき　ふっと
マリエが　もうなくなってしまった人ではなくて
生きている人のように
思えてくるから　ふしぎだ

マリエはぼくの母親だった女性だ
シドは　マリエとぼくは　きかん気で楽天家の
とこが似てるんだという
「羽をもった妖精のような」と　シドはときどき
いった　そうするとぼくも
マリエの少女っぽい笑いのむこうに
うすばねが　あるような気がしてくる
マリエはシドと　この春に結婚した
新婚旅行に出かけた先で　事故にあって死んだ
シドはそのとき左足を失った（ぼくは学校にいた）
彼は足だけでなく
もっとたくさんのものを失ったのだ
といった
「だが　まぁ　きみがいるから」
と　シドはぼくの髪を引っぱりながら
「手に入れたものもある」
どうしてシドは
マリエがぼくによくやってた
髪を引っぱるくせを
知っているのかな

ボーデンは好きだ
シドも好きだ
草むらにたおれて
花になってしまったふりを
するのもいい
ぼくは夢をみる
考えることもある

ぼくとマリエが
いっしょに草の中を
走っている
もつれて

それはふしぎな光景
それから学校や
友人たちの顔など
思いうかぶ
先生や
友人や

ユリスモール・バイハンは
ぼくの友人だった
彼は夏休みの少しまえ
転校していった
神父になるといっていた

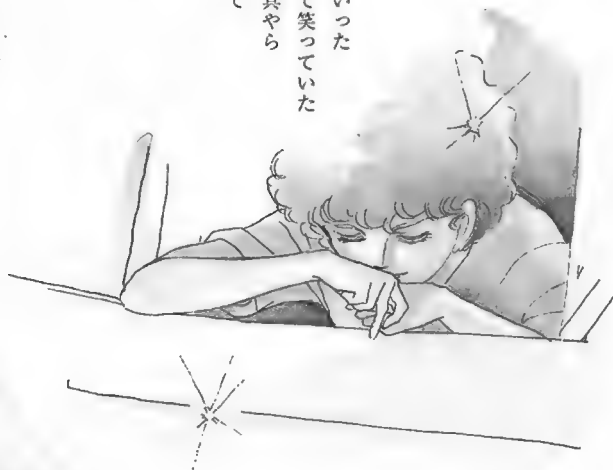
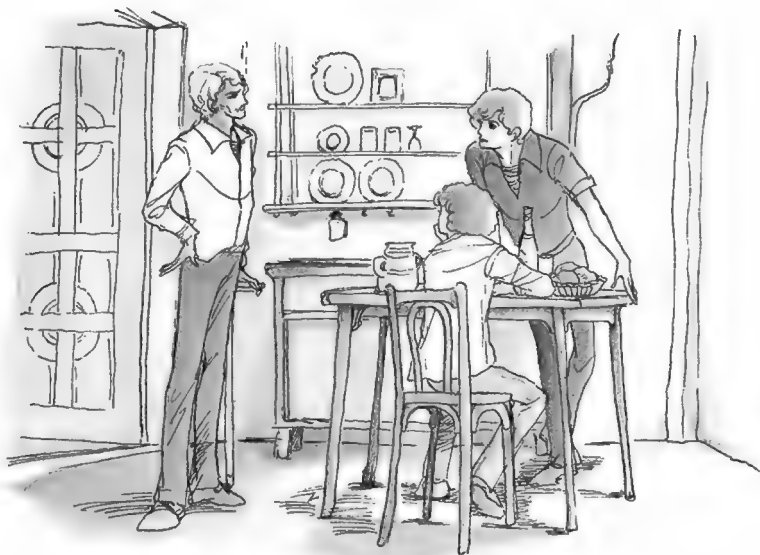
ぼくたちはよくけんかしていた
彼のことで　しょっちゅうおこっていた
でもいまいちばんなつかしい
ユーリはぼくに手紙をくれた
ぼくは返事をかいた
それは短いものだった
ことばでは
何にも伝えることができない

毎日
ヨハンナスピリッツが色づく
それを食べに小鳥が飛んでくる

ぼくたちはみんなで
彼のことをユーリと
呼んでいた
そして　ぼくの義父が
ユーリ・シドという
名だから
いつもは
〝シド〟と呼んでるんだけど
ほんのたまに
〝ユーリ〟とくちから
とびだして　そのとたん
ぼくはびっくりする
シドがふりかえる
シドは笑っている
シドは　ぼくのとまどいを
知っている

はやく
おとなになりたい
いろんなことで
笑えるようになりたい
そうすればこんなに
心臓がドキドキして
苦しいことも
なくなるにちがいない

その朝早く
もやをついて
だれかが小道を
歩いてくるのが見えた
細長い人影は
木の間に見えかくれし
ぼくは部屋の窓辺に
ずっと立ってたが
それが　ぼくの想像どおりの
人間かもしれないと思うと
一足ごとに　どきどきした
それは低い枝をとびこえた
彼は笑っていた

「こんにちは　元気？」
と　オスカーは窓の下からいった
ぼくは窓にほおづえをついて笑っていた
彼の光る髪や顔や時計の金具やら
くつのボタンに目を射られて
たいそう満足して幸福で
何もいえなかった
「いいからおりてこいよ」
窓からとびおりたい

その朝はオスカーが
食事をつくった
シドが現われると
「シュヴァルツさん
おじゃましています」
と　オスカーはいった
シュヴァルツさんは
むずかしい顔をした
「エーリクのおとうさん?」
と　オスカーは話しかけた
エーリクのおとうさんは
目をまるくした
「おじさん」
と　とうとうオスカーはいった
おじさんはせきをした
「シド」
と　オスカーはいった
「なんだね」
と　シドはいった

「学校にいると思ってた」
というと　彼は笑った
「休日はいつも旅行さ」といった
それから
「神学校にいって
ユーリに会ってきたよ」
「彼は家に帰らないの」
「帰らない」
「ユーリは学校で何をしていた」
「いい成績をとっていた」
「何か話した」
「いろいろ」
「何ていってた」
「いろいろ」
「元気だった」
「元気だったよ」

「今はぼくたちは　毎日毎日　雨のあとの草とか
若い樹のように　のびている時期なんだ
毎日　少しずつ
未知に向かって枝をひろげ　根をはり
大きくなっていく時期なんだ
今　知ること
今　考えること
今　感じること
きのうかあすのことじゃない
きのうはきのう　大切なことがあった
あすはまたあすの大切なことがある
だからいつだって
いまこのときが
いちばん重いんだ
今見よう　今聞こう
そしてのびるんだ」
オスカーのせりふ
オスカーは　四日
ボーデンにいた

心のなかに
ひとつの歌が
聞こえてくることがある
ぼくが考えるのは
どうしてたくさんのものを
昨日においてきてしまったのだろうということ
ぼくは　それらがいつも恋しい
どうして今が
永遠につづかないんだろう
どうして人は
出会ったり
別れたりするのだろう
どうしてそのたびに
胸がいたむのだろう
どうして季節は
移るのだろう
どうして何もかも
失われてゆくのだろう
さびしさはどうして
雪のように積もってゆくのだろう

夏がすぎると
星がたくさん
落ちてくる夜がある

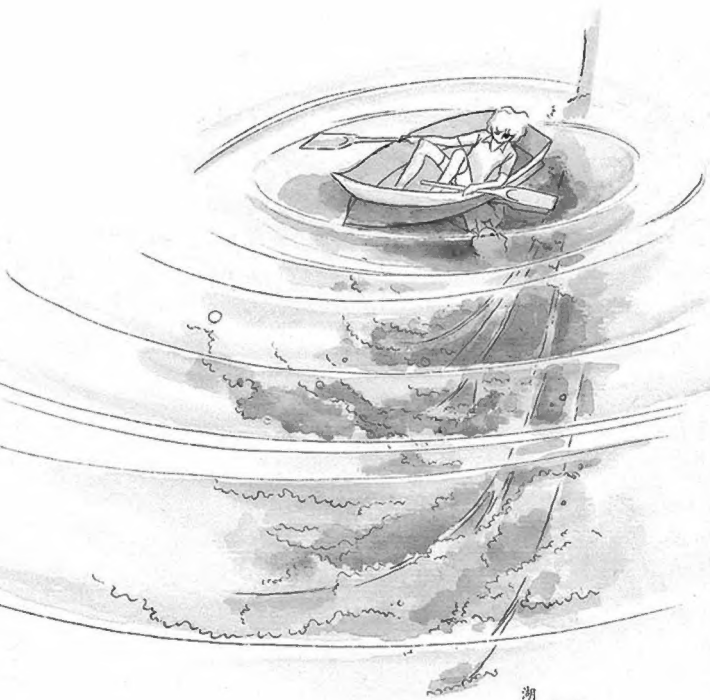
どこかに
星の泉があるだろうか
そこには
失くしたものが
みんなあるだろうか
そこではだれもが
幸福だろうか

「いつでも」とシドはいう
「失われたものはかえってくる」
くりかえす歌のリフレインのように
そしてぼくの髪をひっぱる
「だからー悲しむことはないんだ」

では明日には
何かの訪れがあるだろうか
約束はいつか
果たされるだろうか
明日でなければ
つぎの明日
それとも
そのまたつぎの明日に

思いはいつか
実を結ぶだろうか
そして何もかも
帰ってくるだろうか

涼やかなボーデンの夏

湖畔にて―エーリク　14と半分の年の夏＊おわり＊　『ストロベリーフィールズ』（1976年刊）に掲載

Visitor.
At the
lakeside
Moto Hagio Presents

Visitor At the Lakeside

Moto Hagio Presents

月刊フラワーズ2016年7月号別冊ふろく